

講演要旨

ムスリムと仏教徒の対話の道を探る

東京大学名誉教授
鎌田 繁

<人間同士の対話>

教義や聖典に関係なく、人間は生活をともにすることでなかよくすることはできる。イスラームという宗教と仏教という宗教が対話するのではなく、対話するのはイスラームあるいは仏教という異なる宗教を自らの生き方の中核にもつ人間同士が対話することである。

<仏教とイスラームの本性的違い>

仏教とイスラームはともに長い歴史をへて現在の姿を現しており、それぞれ異なる文化的環境のなかで生まれた宗教であり、宗教という同じ言葉で表現されているが、その内実や基本的な考えかたには大きな相違があり、それぞれの立場での宗教はどのようなものであるか、考えたい。

<仏教とイスラームは歴史的に互いの宗教をどのように知っていたか>

二つの宗教は歴史的に接点をもっていたと考えられるが、かならずしも学問的に詳細に後づけることができるほど明確にはわかっていない。ムスリムの学者や（インドの）仏教者が相手の宗教について述べている記述を紹介し、互いの宗教についてどのような知識をもっていたかを考える。

<時代によって宗教は姿を変える>

歴史的な展開を通して、仏教はさまざまな考え方、宗派を生み出した。日本における展開だけを考えても、鎮護国家の仏教から、極楽往生の教え、鎌倉時代にはいわゆる新仏教として、現代に残るいくつもの仏教宗派の原型が生み出された。近代にはまた仏教系の新宗教も現れている。中国、朝鮮、東南アジアにまで目を広げれば、その多様性は極めて大きい。

イスラームは仏教と異なり、宗教の核心となる聖典、教義、儀礼の大筋は厳密に保持されてきており、形式的には統一性が強いといえるだろう。しかし、参照する聖典のテキストは同一であってもその解釈を通して引き出される意味は異なる場合もあり、クルアーンに次ぐ権威をもつ文献がそれぞれのグループによって異なったりし、イスラームという宗教も決して一枚板であるわけではない。

<他の宗教の存在を認めるための道具に何があるか。イスラームの事例>

自らの信仰の真理性を強く主張する宗教者には時に他の宗教者に対して排撃の態度をとることがある。クルアーンにもそれは見られるが、同時に他の宗教信仰者の存在を許容する表現もある。他の宗教についての言及は限られているが、クルアーンのなかにもあり、またその後のイスラームの展開のなかで他の宗教に好意的に言及する思想もでてくる。このような試みをイスラームの側が広げることができれば対話の可能性は高まる。

<結び>

現実の世界は複数の宗教が会合する場であり、そのような出会いを拒否することはもはやできないであろう。クルアーンをはじめとする伝統的言説に基づいて現実に対応する叡智を生み出すこと、これがムスリムの知識人に課された課題であろう。ムスリムではない宗教者、あるいは自らを宗教者ではないとする者、このような者にとっては、自分是你がたの敵ではないと微笑むことから、日々の生活での出会いを少しずつ広げていくことであろう。

以上